

# 『日本靈異記』 上卷第二縁と『任氏伝』

井 黒 佳穂子

## 一 はじめに

薬師寺の僧、景戒が九世紀前半に編纂した日本最初の仏教説話集、『日本国現報善惡靈異記』（以下『靈異記』と称す<sup>(1)</sup>）が中国の仏教説話の影響を受けていることは、既に大曾根章介氏、河野貴美子氏など先学諸氏によつて指摘されている。

大曾根氏によると、当時、多くの漢籍が日本に将来されていたことは、九世紀後半の藤原佐世撰『日本国見在書目錄』に確認することができ、菅原道真ら中古の漢学者たちの漢詩や説話集には、志怪小説の引用や、翻案と見られるものがいくつも存在している。<sup>(2)</sup>『靈異記』も、そうした中国文化への強い関心をもつて、編纂された説話集であることが容易に想像され、河野氏は『日本靈異記と中国の伝承』において、「つまり『靈異記』は、日本において初の仏教説話集として成立したわけであるが、その説話内容は『冥報記』がそうであったように、それ以前に行われていた奇異譚や怪異譚、すなわち志怪小説的な俗信を内容とする説話を核として形成されたものであるということである」と、<sup>(3)</sup>『靈異記』の背後に志怪小説の影響があったことを示唆している。

『靈異記』上卷第二縁は人と狐の異類婚姻譚であり、仏教説話としての要素は比較的薄いと考えられている。<sup>(4)</sup>本

縁の主題については、仏教説話の見地から「狐と犬の因果、人と狐の宿縁に重点がおかれている」とする寺川眞知夫氏の見解や、「異類婚を下敷きとした恋愛文学である」とする守屋俊彦氏の見解がある。それらを踏まえて、丸山顯徳氏は『靈異記』の話は六朝志怪小説にみられるような狐の伝承の上に、唐代伝奇小説にみられるような恋愛の対象としての狐が加えられて成立したものではあるまいか」と本縁の成立に漢籍の影響があることを指摘している。

志怪小説とは、「怪異を志（しる）す」意で、中国の六朝時代から唐代までの不思議な出来事や、超現実的な話を記録したものを指す。事実性を重要視し、叙述が少なく、断片的なものが多<sup>(8)</sup>い。志怪小説が単純な記録性を基本的性格に持つのに対し、伝奇小説は読者に読ませることを目的とした創作性を基本的性格に持つとされる。

建中二年（七八一）沈既濟によって著された『任氏伝<sup>(9)</sup>』は、唐代伝奇小説の代表的な作品のひとつである。任氏という狐が貧乏な鄭六という若者と結婚し、任氏の献身的な愛情と、卓越した能力によって、次第に豊かになる。やがて、武官に採用されて地方に赴任することになった鄭は、嫌がる任氏に頼み込み、共に任地へと赴くが、その途中、馬嵬で任氏は獬犬に襲われ、噛み殺されてしまったという話である。当時、『任氏伝』が受容されたことは、唐代に成立した『玉堂閒話』『民婦』に「任氏説。豈虚也哉」とあることや、散逸して残っていないが、中唐の詩人である白楽天が、『任氏伝』を題材に、『任氏怨歌行』をつくっていることからわかるだろう。

この『任氏怨歌行』は小島憲之氏によると、承和六年（八三九）に遣唐使、藤原常嗣の帰朝に際して将来されたく、寛平五年（八九三）成立の『新撰万葉集』には、

秋之野野草之袂歟花薄穗丹出手招袖祗見湯濫

休日遊人愛「遠方」道遙埜見「蘆茫」

白花揺動似「招袖」疑是鄭生任氏芳（上巻秋十）

髣髴丹見芝人丹思緒属染手心幹許曾下丹焦礼

任氏顔皐彷彿宜

粉黛不<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>眉似<sub>レ</sub>柳

朱砂不<sub>レ</sub>企唇如<sub>レ</sub>丹

心思肝属猶胸焦(卷下恋二十)<sup>(11)</sup>

と任氏の物語に取材した歌が収められているし、十世紀の半ばに、大江維時によつて編纂された『千載佳句』四四二・八九七にも、「燕脂漠々桃花浅、青黛微々柳葉新」「玉爪蒼鷹雲際滅、素牙黄犬草頭飛」<sup>(12)</sup>と、『任氏怨歌行』の逸文がみえる。

『任氏伝』がいつ日本へもたらされたのかはわからない。しかし、大江匡房が康和三年(一一〇二)に記した『狐媚記』には任氏の名がある。

嗚呼、狐媚変異、多載<sub>二</sub>史籍<sub>一</sub>、殷之妲己、為<sub>二</sub>九尾狐<sub>一</sub>、任氏為<sub>二</sub>人妻<sub>一</sub>、到<sub>二</sub>於馬嵬<sub>一</sub>、為<sub>レ</sub>大被<sub>レ</sub>獲、或破<sub>二</sub>鄭生業<sub>一</sub>、或読<sub>二</sub>古冢書<sub>一</sub>、或為<sub>二</sub>紫衣公<sub>一</sub>到<sub>レ</sub>県、許<sub>二</sub>其女屍<sub>一</sub>、事在<sub>二</sub>惆儻<sub>一</sub>、未<sub>二</sub>必信伏<sub>一</sub>、今於我朝、正見<sub>二</sub>其妖<sub>一</sub>、雖<sub>レ</sub>及<sub>二</sub>李葉<sub>一</sub>、恠異如<sub>レ</sub>古、偉哉。<sup>(13)</sup>

建保七年(一一二九)に編まれた『続古事談』にも「白楽天ノ遺文ノ、文集ニイラザルアリ。ソノ中ニ任氏行ト云フモノアリ」<sup>(14)</sup>とあることから、任氏の物語は日本でも長く享受されていたのだろう。<sup>(15)</sup>

今回は『靈異記』上卷第二縁と『任氏伝』を比較し、その周辺の作品も併せて見ることで、日本の狐女房譚がどのような特徴を持っているのかについて、検討してみたいと思う。

## 二 中国における狐女房譚

美女に変身した狐が男を惑わすという話は六朝時代には既にみえる。『玄中記』『説狐』には、「狐五十歳。能變化爲婦人。百歳爲美女。爲神巫。或爲丈夫。與女人交接。能知千里外事。善蠱魅。使人迷惑失智。千歳即與天通。爲天狐。出玄中記<sup>(16)</sup>」とあり、年を経た狐が人間に変身して怪異をなすと考えられていたようだ。

東晋(三二七—四二〇)の干宝が編纂したとされる『搜神記』『五氣變化』には、「千歳之雉、入海爲蜃。百年之雀、入海爲蛤。千歳之龜、能與人語。千歳之狐、起爲美女。千歳之蛇、斷而復續。百年之鼠、而能相卜。數之至也」とあり、ある年数を経ると変化するものとして、さまざまな動物をあげられているが、その中で千歳の狐は美女になるとされている。同じく『搜神記』『陳羨』に登場する狐は男性を誘惑する美女となっている。

後漢建安中。沛國郡陳羨爲西海都尉。其部曲士靈孝無故逃去。羨欲殺之。居無何。孝復逃走。羨久不見。囚其婦。其婦實對。羨曰。是必魅將去。當求之。因將步騎數十。領獵犬。周旋于城外求索。果見孝于空家中。聞人犬聲。怪避。羨使人扶以歸。其形頗象狐矣。略不復與人相應。但啼呼索阿紫。阿紫雌狐字也。後十餘日。乃稍稍了寤。云。狐始來時。于屋曲角雞雞棲間作好婦形。自稱阿紫。招我。如此非一。忽然便隨去。即爲妻。暮輒與共還其家。遇狗不覺。云。樂無比也。道士云。此山魅。狐者先古之淫婦也。名曰阿紫。化爲狐。故其怪多自稱阿紫也。出搜神記

本文末尾には「此山魅。狐者先古之淫婦也。名曰阿紫。化爲狐。故其怪多自稱阿紫也」とあり、狐の出自を古代の

淫婦としているが、その詳しい由来は不明である。西岡晴彦氏は、阿紫が漢代の『楚辞』『天問』にみられる羿の妻、純狐の流れを受け継いで、古代の淫婦として位置付けられののだとしているが、よくわからない。<sup>(17)</sup>

この「阿紫」と同じような話は、日本にも存在して散逸して残らないが、『扶桑略記』寛平八年九月所引の『善家秘記』や、『今昔物語集』巻第十六「備中国賀陽良藤、為狐夫得観音助語第十七」、金沢文庫本『観音利益集』、御伽草子『狐の草子』などが知られている。「阿紫」の影響を受けたものかどうかはわからないが、大曾根章介氏が指摘するように、『善家秘記』を編纂した三善清行が、『搜神記』の編者である千宝になぞらえて、自らを「鬼之董狐」と記したり、『日本国見在書目録』を編んだ藤原佐世とも交流があることなどからも、漢籍の影響が少なからずあったのだろう。

さらに、八世紀半ばに唐の戴孚によつて編纂された『廣異記』「李靡」は、西岡氏が指摘するように、『任氏伝』と共通する要素がみられる。<sup>(19)</sup>

東平尉李靡初得<sub>レ</sub>官。自<sub>二</sub>東京<sub>一</sub>之<sub>レ</sub>任。夜投<sub>二</sub>故城<sub>一</sub>。店中有<sub>二</sub>故人<sub>一</sub>賣<sub>二</sub>胡餅<sub>一</sub>爲<sub>レ</sub>業。其妻姓鄭有<sub>二</sub>美色<sub>一</sub>。李目而悦<sub>レ</sub>之。因宿<sub>二</sub>其舍<sub>一</sub>。留連數日。乃以<sub>二</sub>十五千<sub>一</sub>轉<sub>二</sub>索胡婦<sub>一</sub>。既至<sub>二</sub>東平<sub>一</sub>。寵遇甚至。性婉約。多<sub>レ</sub>媚黠。風流。女工之事。罔<sub>レ</sub>不<sub>二</sub>心了<sub>一</sub>。於音聲特究<sub>二</sub>其妙<sub>一</sub>。在<sub>二</sub>東平<sub>一</sub>三歲。有<sub>二</sub>子一人<sub>一</sub>。其後李充<sub>二</sub>租綱<sub>一</sub>入<sub>レ</sub>京。與<sub>レ</sub>鄭同還。至<sub>二</sub>故城<sub>一</sub>。大會<sub>二</sub>鄉里<sub>一</sub>飲宴。累十餘日。李催<sub>レ</sub>發數四。鄭固稱<sub>レ</sub>疾不<sub>レ</sub>起。李亦憐而從<sub>レ</sub>之。又十餘日。不<sub>レ</sub>獲<sub>レ</sub>已。事理須<sub>レ</sub>去。行至<sub>二</sub>郭門<sub>一</sub>。忽言<sub>二</sub>腹痛<sub>一</sub>。下<sub>レ</sub>馬便走。勢疾如<sub>レ</sub>風。李與<sub>二</sub>其僕數人<sub>一</sub>極<sub>レ</sub>騁。追不<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>及。便入<sub>二</sub>故城<sub>一</sub>。轉入<sub>二</sub>易水邨<sub>一</sub>。足力少息。李不<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>捨。復逐<sub>レ</sub>之。垂<sub>レ</sub>及。因入<sub>二</sub>小穴<sub>一</sub>。極<sub>レ</sub>聲呼<sub>レ</sub>之。寂無<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>應。繼結<sub>二</sub>悽愴<sub>一</sub>。言發<sub>二</sub>淚下<sub>一</sub>。會日暮。村人爲<sub>二</sub>草塞<sub>一</sub>穴口。還<sub>レ</sub>店止<sub>レ</sub>宿。及<sub>レ</sub>明。又往呼<sub>レ</sub>之。無<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>見。乃以<sub>レ</sub>火燠。久之。村人爲<sub>二</sub>掘深數丈<sub>一</sub>。見<sub>二</sub>牝狐死<sub>一</sub>穴中。衣服脫卸如<sub>レ</sub>蛻。脚上著<sub>二</sub>錦

襖<sup>一</sup>。李歎息良久。方埋<sup>レ</sup>之。歸<sup>レ</sup>店。取<sup>二</sup>獵犬<sup>一</sup>噬<sup>二</sup>其子<sup>一</sup>。子略不<sup>二</sup>驚怕<sup>一</sup>。便將<sup>レ</sup>入<sup>レ</sup>都。寄<sup>二</sup>親人家<sup>一</sup>養<sup>レ</sup>之。輪納畢。復還<sup>二</sup>東京<sup>一</sup>。婚<sup>二</sup>於蕭氏<sup>一</sup>。蕭氏常呼<sup>レ</sup>李爲<sup>二</sup>野狐塚<sup>一</sup>。李初無<sup>二</sup>以答<sup>一</sup>。一日晚。李與<sup>レ</sup>蕭携<sup>レ</sup>手與歸<sup>二</sup>本房<sup>一</sup>狎戲。復言<sup>二</sup>其事<sup>一</sup>。忽聞<sup>三</sup>堂前有<sup>二</sup>人聲<sup>一</sup>。李問阿誰夜來。答曰。君豈不<sup>レ</sup>識<sup>二</sup>鄭四娘<sup>一</sup>耶。李素所<sup>二</sup>鍾念<sup>一</sup>。聞<sup>二</sup>其言<sup>一</sup>。邊欣然躍起。問。鬼乎人乎。答云。身即鬼也。欲<sup>レ</sup>近<sup>レ</sup>之而不<sup>レ</sup>能。四娘因謂<sup>レ</sup>李。人神道殊。賢夫人何至<sup>二</sup>數相謾罵<sup>一</sup>。且所<sup>レ</sup>生之子。遠寄<sup>二</sup>人家<sup>一</sup>。其人皆言<sup>二</sup>狐生<sup>一</sup>。不<sup>レ</sup>給<sup>二</sup>衣食<sup>一</sup>。豈不<sup>レ</sup>念乎。宜<sup>二</sup>早爲<sup>二</sup>撫育<sup>一</sup>。九泉無<sup>レ</sup>恨也。若夫人云云相侮。又小兒不<sup>レ</sup>收。將<sup>レ</sup>爲<sup>二</sup>君之患<sup>一</sup>。言畢不<sup>レ</sup>見。蕭遂不<sup>二</sup>復敢說<sup>一</sup>其事<sup>一</sup>。唐天寶末。子年十餘。甚無恙。

しかし、『任氏伝』では子供は誕生しないが、『李摩』では子供を一人もうけているなど相違点もあることから、『任氏伝』との影響関係は定かではない。

### 三 犬による破綻

狐が犬を恐れるという話は、『陳羨』の他、志怪小説に多く見られることから、中国の伝承による影響が大きいと考えられる。

例えば『搜神記』『張華』には、

時豊城令雷煥字孔章。博物士也。來訪<sup>レ</sup>華。華以<sup>二</sup>書生<sup>一</sup>白<sup>レ</sup>之。孔章曰。若疑<sup>レ</sup>之何呼<sup>二</sup>獵犬<sup>一</sup>試<sup>レ</sup>之。乃命<sup>二</sup>犬以<sup>一</sup>試。竟無<sup>二</sup>憚色<sup>一</sup>。狐曰。我天生<sup>二</sup>才智<sup>一</sup>。反以爲<sup>レ</sup>妖以<sup>レ</sup>犬試<sup>レ</sup>我。遮莫千試万慮其能爲<sup>レ</sup>患乎。華聞益怒曰。此必眞妖也。聞魑魅忌<sup>レ</sup>狗。所<sup>レ</sup>別者數百年物耳。千年老精不<sup>レ</sup>能<sup>二</sup>復別<sup>一</sup>。惟得<sup>二</sup>千年枯木<sup>一</sup>照<sup>レ</sup>之。則形立

見。

とあり、

『異苑』『胡道洽』には、

胡道洽。自云「廣陵人」。好「音樂」醫術之事。體有「臊氣」。恒以「名香」自防。唯忌「猛犬」。自審「死日」。戒「弟子」曰。氣絶便殯。勿「令狗見」我尸也。死于山陽。斂畢。覺「棺空」。即開看。不「見」尸體。時人咸謂「狐也」。出異苑

とある。

『任氏伝』でも、「信宿、至「馬嵬」。任氏乘「馬居」其前、鄭子乘「驢居」其後、女奴別「乘」、又在「其後」。是時西門圍人教「獵狗於洛川」、已旬日矣。適值「於道」、蒼大騰「出於草間」。鄭子見「任氏歛然墜」於地、復「本形」而南馳。蒼大逐之。鄭子隨走叫呼、不「能」止。里餘、爲「大所」獲」とあるように、鄭に懇願されて仕方なく同行した任氏が、馬嵬で犬に噛み殺されてしまうという、より悲劇的な内容になっている。馬嵬は楊貴妃が殺害された場所として有名であり、この場所を持ち出すことで沈既済が意図的に悲劇を暗示させた可能性については、先行論文による指摘が既にある。<sup>(20)</sup>ところで中国では狐は狩の対象とされた。『論語』『郷黨』には、「君子不「下」以「紺緌」飾」。紅紫不「三」以爲「褻服」。當「暑」褌絺綌、必表而出之。緇衣羔裘。素衣麕裘。黃衣狐裘。褻裘長、短「右袂」<sup>(21)</sup>とあり、また『史記』『田敬計完世家』では「淳于髡曰、狐裘雖「弊」、不「可」補以「黃狗之皮」。騶忌子曰、謹受「令」。請謹擇「君子」、毋「雜」小人其間」とある。さらに『史記』『孟嘗君伝』には、「於「是」秦昭王乃止。囚「孟嘗君」、謀欲「殺」之。孟嘗君使「人」抵「昭王幸姬」求「解」。幸姬曰、妾願得「君狐白裘」。此時孟嘗君有「一」狐白裘」。直千金、天下無雙<sup>(23)</sup>」とあり、秦の昭王によって囚われた孟嘗君が幸姬に助命を頼むと、幸姬は自分に狐白裘をくれ

るのなら協力すると言う。狐の皮衣は狐裘と呼ばれ、特に狐の腋下の白毛で造られた皮衣を狐白裘といい、貴顕の間で珍重されていたことがうかがえる。狐が犬、特に獵犬を恐れるという発想は、このようなところにあるのだろう。

『靈異記』上巻第二縁でも、犬が狐女房の正体を暴く役割を担っているが、その展開は志怪小説とは少し異なっている。

時に其の家の犬、十二月の十五日に子を生みき。彼の犬の子、家室に向ふ毎に、期尅ひ睡み皆み嗥吠ゆ。家室脅え惶りて、家長に、「此の犬を打ち殺せ」と告ぐ。然あれども、患へ告げて猶し殺さず。二月三月の頃に、設けし年米を舂きし時に、其の家室、稻舂女等に間食を充てむとして碓屋に入りき。即ち彼の犬、家室を咋はむとして追ひて吠ゆ。即ち驚き澡ち恐り、野干と成りて籠の上に登りて居り。

本縁では、男の家に最初から犬が飼われている。しかも破綻の原因となつたのは、最初から飼われている犬ではなく、その犬の子である。どうして男の家に最初から飼われている母犬ではなく、犬の子が破綻の原因となつたのか。

この問題について、寺川氏は「子犬と狐の対立が前世の宿縁と云う運命的対立とすれば、元から居た母犬ではなく、後に生まれた子犬だけが家室に挑んだとしても不自然ではない」と述べている。<sup>(24)</sup>確かに、『靈異記』下巻第二縁のように、狐と犬が宿報において殺し合うという説話もある。しかし本縁には、狐と犬の子が対立する起因となつた事実が記されておらず、そうした仏教的因果關係を読むことは難しい。それでは、本縁で犬の子を登場させている理由は何かという点、長野一雄氏が指摘する<sup>(25)</sup>ように、作者の作意と考えたほうが適當だと考える。つまり、最初からいた母犬が正体を暴いてしまうと、狐女房は男の家に嫁いだ時点で、正体を見破られてしまい、子供を生む前に男の元を去らなければならない。そうすると、本縁の始祖譚としての意味を為さないため、狐女房に子供が生まれた後で、破綻の原因を作る必要があつたのだろう。子供が生まれた時点で、狐女房は既に役割を終えたことになり、犬の



子が登場したとも考えられる。このように、『靈異記』上巻第二縁は中国の伝承を用いながらも、そこに意図的な改変を加えて成立したといえるだろう。

#### 四 妾・妻・家室

『靈異記』上巻第二縁が「狐の直」を語る始祖譚であれば、子供の存在は必然となる。特に、異類婚によって生まれた子供を始祖とする例は、『古事記』上巻の天孫火遠理命と海神の娘豊玉姫との間に生まれた鵜葺草葺不合命や、寛一本『平家物語』巻第八「緒環」<sup>(26)</sup>に見られる、祖母嶽明神の子孫である緒方三郎惟義、説経節「しのだづま」の安倍安名と葛の葉との間に生まれた安倍清明、など列挙に暇がない。寺川氏は『靈異記』に仏教的潤色が加えられていることから、本縁は始祖伝承としての性格も、昔話としての性格も失っているとするが、本文末尾を「三乃国の狐の直等が根本是なり」とすることからも、やはり始祖譚という性格を無視することはできないように思われる。<sup>(27)</sup>

これに対して、『任氏伝』では鄭と任氏の間に子供は生まれない。その代わり、任氏が能力を発揮して、貧しい鄭を裕福にするという致富譚の要素を持つ。どうして、任氏と鄭の間に子供が生まれなかったか。その理由を考えてみると、まず鄭には最初から妻が存在し、あくまで任氏は妾という立場だったことがあげられる。官職を得た鄭が、「時鄭子方有妻室」、雖晝遊於外、而夜寢於内、多恨不<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>專其夕。將<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub><sub>レ</sub>官、邀與任氏俱去」と、昼間は任氏と過<sub>レ</sub>ごすことができて、夜は正妻の元へ帰らなければならないことを残念に思い、任氏と共に任地へ赴こうとする場面がある。ここに妻と妾の身分差がはっきりと現れている。

また、任氏は鄭と最初に出会ったときに、「任氏曰、可<sub>レ</sub>去矣。某兄弟、名係<sub>二</sub>教坊<sub>一</sub>、職屬<sub>二</sub>南衙<sub>一</sub>。晨興將<sub>レ</sub>出。

不<sup>レ</sup>可<sup>二</sup>淹留<sup>一</sup>。乃約<sup>二</sup>後期<sup>一</sup>而去。」と語っている。教房は長安に官立された音楽・歌舞の教習所だが、民間で營業する娼妓もここに籍を置いていた。<sup>(28)</sup> 任氏も教房に所属する、娼妓の一人だったのだろう。鄭の妾となった任氏は、乱暴しようとした釜を理屈で退けたり、知恵を授けて鄭に金儲けさせたりと、理想の女性のように振る舞う。しかし、唐代では妾を妻にすることを禁じていたらしく、男子を生んでも家族とは見なされなかった。鄭は任氏の正体が狐であると知ってから、彼女を愛し続けたが、嫌がる任氏を無理に同行させ、馬鬼で死なせてしまう。鄭の愛情に殉じた任氏には、唐代の妾の悲劇が投影されている、という見方もできるだろう。

一方、『廣異記』「李靡」では先にも述べたように、李と鄭の間に子供が一人いる。鄭は餅売りの妻だったが、彼女の美貌を愛でた李が、十五千で譲り受けた。妻は妾とは異なり、売買の対象ではないため、「故人（古くからの知人）から買う」というのは奇妙である。しかし、唐代詩人の逸話を記した『本事詩』「情感」には、寧王李憲が隣に住む餅売りから無理に妻を奪い取るという話がある。

寧王曼貴盛、寵妓數十人。皆絶藝上色。宅左有<sup>二</sup>賣餅者<sup>一</sup>。妻織白明媚。王一見屬<sup>レ</sup>目、厚遺<sup>二</sup>其夫<sup>一</sup>取<sup>レ</sup>之。寵惜逾<sup>レ</sup>等。還歲、因問<sup>レ</sup>之、汝復憶<sup>二</sup>餅師<sup>一</sup>否。默然不<sup>レ</sup>對。王召<sup>二</sup>餅師<sup>一</sup>、使<sup>レ</sup>見<sup>レ</sup>之。其妻注視、雙淚垂<sup>レ</sup>頰、若<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>勝<sup>レ</sup>情。時王座客十餘人、皆當時文士、無<sup>レ</sup>不<sup>二</sup>悽異<sup>一</sup>。王命賦<sup>レ</sup>詩。王右丞維詩先成。莫<sup>レ</sup>以<sup>二</sup>今時寵<sup>一</sup>、寧忘<sup>二</sup>舊日恩<sup>一</sup>。看<sup>レ</sup>花滿目淚、不<sup>二</sup>共<sup>二</sup>楚王<sup>一</sup>言<sup>(29)</sup>上。

いずれの場合も前夫は餅売りとなっているが、妻を買い取る男は「李靡」では役人であり、『本事詩』「情感」では王であった。身分の低い者や貧しい者が生活のために、身分の高い者や裕福な者へ、やむを得ず妻を売ることがあったかもしれない。この場合、妻は財産と同じ扱いである。

財産という立場から考えると、急に小さな穴へ逃げ込んだ鄭を火で燻したり、正体が狐と知ると子供に犬をけしか

けてみるなど、李の残酷な対応も納得がいくだろう。鄭や李は女たちの正体が狐であることを知っても、慕い続けた。しかし、それは妾という所有物に対する執着であって、決して対等な存在としては見られなかった。当時の婚姻制度を社会背景として、彼女たちの所有者である男性により、悲劇的な結末がもたらされるに至ったのだ、と推測することもできるのではないだろうか。

それでは『霊異記』上巻第二縁の場合はどうだろう。ここでは狐女房は「家室（イヘノトジ）」と呼ばれている。

一般的に、家室は主婦と解釈されることが多いようだ。だが、関口裕子氏は『霊異記』の豪族層における家室は、夫である家長と一対の統率者であり、財産も個人で所有したと分析している。<sup>(30)</sup>だとすれば、『霊異記』上巻第二縁の狐女房は、『任氏伝』や『李摩』のような妾とは明らかに異なる。さらに『霊異記』中巻第十六縁は、貧しい老夫婦に施しをしたので、黄金の宮殿に生まれ変わることを約束された女と、老夫婦に施すのを嫌がったが、牡蠣を放生したお陰で、あの世で獄卒に斬首されるところを免れて、蘇生できた男の話である。

七日にして乃ち蘇め、妻子に語りて言はく、「法師五人前に有りて行き、憂婆塞五人、後に有りて行く。行く路広く平かに、直きこと墨繩の如し。その路の左右に、宝幡を立て列ね、前に金の宮有り。『いずれの宮ぞ』と問ふ。憂婆塞、睥せて諱にきて曰はく、『斯は汝が家室の生れむとする宮なり。耆嫗を養ふ。此の功德に因りて、是の宮を為作る。汝、我を知るか』といふ。『知らず』と答ふ。教へて曰はく、『当に知るべし、十人の法師憂婆塞は、汝が贖ひ放ちし蠣十貝なり』といふ。宮門の左右に、額に一つの角生ひたる人有り。大刀を捧げて、吾が頸を殺らむとす。法師憂婆塞、諫めて戮らしめず。門の左右に蘭しき饌を備けて、諸人樂しび食ふ。吾、中に居ること七日、飢ゑ渴きて、口より焰を出す。然るに言はく、『汝飢ゑたる耆嫗に施さずして、厭ひし罪の報なり』といふ。法師憂婆塞、吾を將て還り、纔見れば乃ち蘇めたるなりけり」といふ。

第十六縁に登場する女は「家室」であり、男は家の「使人」とされている。松の木から落ちて死んだ男は、十人の法師・憂婆塞に導かれて黄金の宮殿の前を通る。あれは誰の住居かと尋ねる男に、憂婆塞は「斯は汝が家室の生れむとする宮なり」と答える。男は家の使人であるから、この家室を主婦とするのは不自然であり、やはり女主人と解釈すべきだろう。

さらに関口氏は、日本における班田制のあり方が、中国の規定とは異なることや、律令規定に伴う諸特権が女性に与えられることから、「女性が自らの独立した地位を共同体（ないし社会）に占めえた日本と、女性の存在が家父長権に包摂され、女性自らが独立した地位を占めえない中国との相違に基づいているのである」と述べている。このことから『靈異記』上巻第二縁の狐女房は、夫と対等の存在として扱われており、正体が露見した後も暫くは通い続け、自分の意志で去るという形をとったのだと考える。そして子供が「狐の直」を名乗り、それが始祖譚となりえたのも、『靈異記』上巻第二縁の狐女房が、任氏や鄭よりずっと高い地位を獲得していたことにあると思われるのである。

## 五 始祖伝承と農耕儀礼

ここまで、『靈異記』上巻第二縁の狐女房が『任氏伝』とは異なり、夫と対等な関係を築くことが可能であったために、中国伝承に影響を受けながらも、始祖譚たりえたことを述べた。それでは、このような伝承を保持していたのは誰だったのだろうか。従来の研究では、美濃地方に実在した渡来系の豪族とされることが多い。だが、「狐の直」が実在したのかどうかについては不明であり、未だ推測の域を出ないのが実状である。これに対し、矢作武氏は宋代

に成立した『幽明録』にある、淳于矜の話の翻案とみるべきであるとし、寺川氏も本縁が『幽明録』に影響を受けたことを指摘する。<sup>(31)</sup>

晋太元中、瓦官寺仏図前淳于矜、年少潔白。送客至石頭城南、逢一女子。美姿容。矜悦之因訪問、二情既和、將入城北角、共盡欣好、便各分別。期便剋集、便欲結為伉儷。女曰、得婿君如死何恨。我兄弟多、父母並在。當問我父母。矜便令女婢問其父母。父母亦懸許之。女勅婢取銀百斤絹百匹、助矜成婚。經久養兩兒。當作秘書監。明果驟卒來召、車馬導從前後部鼓吹。經少日、有獵者過覓矜。將數十狗。徑突入、齧婦及兒。並成狸。絹帛金銀並是草及死人骨蛇魅等。<sup>(32)</sup>

しかし、『幽明録』では女の正体を狸としている。『大漢和辞典』によれば「狸」は「野猫」の意であり、狐ではない。さらに、犬が子供まで喰い殺していることなどから、『幽明録』の直接的影響を示唆することはできないだろう。また、景戒の仮構という可能性は大いにありうると思うが、「美野国大野郡」という特定の地名をあげていることや、渡来系豪族の存在について否定することも難しく、一概にいうことはできない。ともあれ、中国の狐に対する信仰が何らかの形で持ち込まれ、それが本縁に影響を及ぼしていることは間違いないようだ。

唐代には狐を神とする信仰が存在したらしく、唐代に成立したとされる『朝野僉載』「狐神」には「唐初已來。百姓多事狐神」。房中祭祀以乞恩。食飲與人同之。事者非一主。當時有諺曰。無狐魅。不成村」とあり、多くの人が狐を神として祀り、狐魅なくしては村は成り立たないという諺さえあった、という。

唐代以前の狐について、西岡氏は「神秘的な畏怖の対象」「結婚や性的結合の象徴」「狡賢い動物」「礼節をわきまえた動物」というイメージで総括できるとする。<sup>(33)</sup>特に中国最古の詩集とされる『詩経』衛風「有狐」には狐を恋人になぞらえた歌がみられ、狐が性的な印象を与える動物であったことがわかる。

有<sup>レ</sup>狐綏綏 在<sup>二</sup>彼淇梁<sup>一</sup>

心之憂矣 之子無<sup>レ</sup>裳

有<sup>レ</sup>狐綏綏 在<sup>二</sup>彼淇<sup>一</sup>

心之憂矣 之子無<sup>レ</sup>帶

有<sup>レ</sup>狐綏綏 在<sup>二</sup>彼淇側<sup>一</sup>

心之憂矣 之子無<sup>レ</sup>服<sup>(34)</sup>

ところで、このような男女の交歓には時期があつたらしく、『詩経』邶風「匏有苦葉」には氷が融ける前に妻を娶るのがよい、とされている。

匏有<sup>二</sup>苦葉<sup>一</sup> 濟有<sup>二</sup>深涉<sup>一</sup>

深則厲 淺則揭

有<sup>二</sup>漙濟盈<sup>一</sup> 有<sup>二</sup>鷺雉鳴<sup>一</sup>

濟盈不<sup>二</sup>濡軌<sup>一</sup> 雉鳴求<sup>二</sup>其牡<sup>一</sup>

雝雝鳴雁 旭日始旦

士如歸<sup>レ</sup>妻 迨<sup>二</sup>冰未<sup>一</sup>泮

招招舟子 人涉<sup>レ</sup>否

人涉<sup>レ</sup>否 卬須<sup>二</sup>我友<sup>一</sup><sup>(35)</sup>

思想書である『荀子』卷第十九大略篇第二十七にも、「霜降逆<sup>レ</sup>女、冰泮殺。内十日<sup>一</sup>御。」<sup>(36)</sup>とあり、霜が降りる頃に妻を迎え、氷が溶ける頃には控えることから、だいたい仲冬から中春の頃を婚姻の時期としたようだ。

これは農閑期にあたり、春になって農事が始まると忙しくなることから、このような考え方が発生したとされる。

『詩経』衛風「有狐」もまた、このような時期の歌だったのではないだろうか。さらに前漢時代に成立した『詩経』の注釈書の一つである、『韓詩外伝』には「狐水神也」<sup>37)</sup>とあり、中国でも狐を水や農耕と関連付けるような信仰があるいは存在したかもしれない。日本でも、狐は春から秋にかけて、子育てのために人里近くに出没する習性があることから、しばしば農耕儀礼とも結び付けられてきた。狐を神使とする伏見稻荷大社も祭神は宇迦御魂神であり、農耕を司る神とされている。また、狐が稲を伝えたという伝説も各地に残されており、狐と農耕との関わりは深い。

『靈異記』上巻第二縁もまた農耕儀礼と深く関わっているとされ、長野氏は本縁がほぼ一年間の稲作生活と関係して、成立していることを指摘している。狐の正体が顯れて、婚姻が破綻するのを「設けし年米を舂きし時」としたのも、この行事が一年の稲作生活の区切りであったからだ、という見方をしている。この見解を更に具体的に示したのは寺川氏で、「二、三月頃に年米を舂いている碓屋を事件の場として設定したのは、収穫の翌年一月から八月に京に年科春米と年祖春米を運ぶことになっており（『田令』）、美濃国は四月三十日以前に運ぶことになっていた（『延喜式』民部下）<sup>38)</sup>事実に対応している。美濃の豪族の実生活に即した具体的な記述がなされているのである」と述べている。

狐は食料が乏しくなる秋冬にかけて、人里に下りてくることがあったらしい。民俗学では、祖霊である山の神を田の神として迎える信仰があり、狐もその使いとされていたことが諸先学によって指摘されている。守屋氏は狐は稲を豊かに実らせる呪力を持っており、元は斎屋で稲の豊穰を祈る儀礼を行っていたのが、次第に碓屋へと変容したのだろうと述べる。<sup>39)</sup>狐が豊穰をもたらずか否かは別として、このような狐の習性が農耕儀礼と結びつき、本縁の基底に存在しているのだらう。

## 六 まとめ

『靈異記』は中国伝承の影響を色濃く受けている説話集であり、上巻第二縁も志怪小説などにみられる狐妖譚が関わっていることは否定できないだろう。河野氏は大陸文化の窓口であった元興寺と、景戒との関係から、景戒が帰化人や大陸文化と接触し、その靈異譚・奇異譚への興味から『靈異記』を編纂するに至ったことを述べている。<sup>(40)</sup> もちろん、景戒が『靈異記』上巻序文において、「何ぞ、唯し他国の伝録をのみ慎みて、自土の奇事を信じ恐りざらむや」と記しているように、自国の説話であることも強調する。中国説話の模倣でありながらも、模写ではないところに、景戒の自国に対する意識が感じられるのではないだろうか。

『靈異記』上巻第二縁は、志怪小説などにみられる、狐妖譚の影響を受けながら、日本化された説話として成立している。それは、『任氏伝』が大に殺されるという悲劇で破綻せざるをえなかったのに対し、『靈異記』上巻第二縁では「家室」という特殊な名称を用いて、母系始祖譚を認めたことにも顕れているだろう。このような、他者によって排除されない狐女房譚は、次第に中国伝承からも離れ、御伽草子『木幡狐』や説経節『しのだつま』など、日本化された狐女房譚として受け継がれていく。さらに、その主題も夫婦の関係から、母子の関係へと移行し、稻荷信仰とも結合して次第に神格化され、始祖譚としての性質をより強固なものにしていったのだと考えるのである。

## 注

(1) 以下、『靈異記』本文は新編日本古典文学全集『日本靈異記』（小学館、一九九五年九月）による。



(2) 大曾根章介氏は「説話における日中比較文学——志怪小説を中心に——」（『今昔物語集宇治拾遺物語必携』学燈社、一九八八年一月）において大納言源能有の五十の賀宴に際して、菅原道真が屏風絵に賦した漢詩には、『列仙伝』『幽明録』『異苑』『述異記』の引用が認められることを述べている。

(3) 河野貴美子『日本靈異記と中国の伝承』勉誠出版、一九九六年十月

(4) 河野貴美子氏は「『靈異記』は編者景戒の真摯な仏教への信仰心に支えられて成立しているものであり、「仏教説話集」であるという位置付けはゆるがない。が、と同時に『靈異記』の中には仏教色の希薄な、説話のタイプとしては世俗説話的なものも含まれているのである」と述べている。

(5) 寺川真知夫「説話と昔話・氏族伝承——『靈異記』上巻第二縁の場合——」『古代文化』一九七五年八月

(6) 守屋俊彦『続日本靈異記の研究』三弥井書店、一九七八年十一月

(7) 丸山顯徳『日本靈異記説話の研究』桜楓社、一九九二年十二月

(8) 「小説」という言葉は、一般的に novel の訳語として用いられている。しかし、莊周（前四世紀ごろ）が著したとされる『莊子』外物篇には、「小説を飾り以て県令を干むるは、其の大達に於て、亦遠し」と見え、「小説」は些細な言説の意と解釈されている。また、班固（三二—九二）の著した前漢王朝の正史『漢書』藝文志の諸子略では、小説家を他家よりも軽視して「小説家傍流は蓋し稗官に出づ。街談巷語、道德塗説者の造るところなり」と評している。稗官とは政治の参考にするために、民間の説話・物語などを集めることを任務とした役人とされ、そのため彼等が集めた書物には学術的根拠に乏しいものが多く、重要視されなかったと考えられる。

ところが、後漢以降になると情勢は変化し、それまで中央で独占されていた思想や文化にも影響し、新興の

豪族や貴族を中心としたグループやサロンが発生した。さらに、これまでの儒家思想への疑念から道家思想が流行し、西域からは仏教が伝来した。このような中で怪異を語る風潮が広まり、多くの六朝志怪小説が著されたと考えられる。

- (9) 以下、『任氏伝』本文は新釈漢文大系『唐代伝奇』（明治書院、一九七二年九月）による。
- (10) 小島憲之『国風暗黒時代の文学―弘仁期の文学を中心として―中（上）』塙書房、一九七三年一月
- (11) 『新編国家大観』私撰集編歌集、角川書店、一九八四年三月
- (12) 金子彦二郎『平安時代文学と白氏文集』芸林舎、一九七七年五月
- (13) 日本思想大系『古代政治社会思想』岩波書店、一九七九年三月
- (14) 『続古事談』本文は『続古事談注解』（和泉書院、一九九四年六月）による。
- (15) この他にも藤原基俊撰『新撰朗詠集』『上巻春・春雨洗花顔』に「写得楊妃後鬢、模成任氏汗来唇」とあり、『任氏伝』が知られていたことがうかがえる。
- (16) 以下、本文に注のないものは『太平廣記』（中華書局出版、一九六一年九月）による。
- (17) 西岡晴彦『八任氏伝／遡源考』『熊本大学法文論叢』一九七五年二月
- (18) 大曾根章介『街談巷説と才学』『国文学―解釈と教材の研究―』学燈社、一九七二年九月
- (19) 論文に同じ。
- (20) 近藤春雄『唐代小説について』『愛知県立大学文学部論集』一九六七年十二月
- 渡辺精一『唐代小説「任氏傳」札記』『國學院雜誌』一九七九年六月
- (21) 新釈漢文大系『論語』明治書院、一九六〇年五月

- (22) 新釈漢文大系『史記』「世家中」明治書院、一九七九年十月
- (23) 新釈漢文大系『史記』「列伝中」明治書院、一九九三年五月
- (24) (5) 論文に同じ。
- (25) 長野一雄「美濃狐」『日本靈異記』早稲田大学出版部、一九七七年十二月
- (26) 覚一本系統でも寂光院本・西教寺文庫本・龍門文庫本・流布本には章段名がない。
- (27) 御伽草子『木幡狐』では、若君が三歳になったとき立派な犬が献上され、それを契機としてきしゅ御前(狐女房)が家を出る場面がある。
- (28) 小林一美・任明訳『大唐帝国の女性たち』岩波書店、一九九九年五月
- (29) 内山知也「本事詩校勘記」『大東文化大学紀要』8号、一九七〇年二月
- (30) 関口裕子「日本古代の家族形態と女性の地位」『家族史研究』大月書房、一九八〇年十月
- (31) 矢作武「『靈異記』と中国文学」『日本靈異記』早稲田大学出版部、一九七七年十二月
- (32) 『大正新修大蔵経』巻第五十三事彙部、一九二八年一月
- (33) 西岡晴彦「任氏伝論―その小説史的位罫―」『中国文学研究』一九六六年十二月
- (34) 漢詩大系『詩経』集英社、一九六一年二月
- (35) (34) に同じ。
- (36) 新釈漢文大系『荀子』明治書院、一九六九年六月
- (37) 『太平御覧』中文出版社、一九八〇年三月
- (38) 寺川真知夫『日本国現報善惡靈異記の研究』和泉書院、一九九六年三月

(40) (39)

(3) (5)

論文に同じ。  
論文に同じ。